
愛して暮れる

荒桐あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛して暮れる

【Nコード】

N8749N

【作者名】

荒桐あきら

【あらすじ】

「わたしは初めて、母のことを、妬ましいと思った」 幼いころ、大好きだった母を亡くした上村日和子は、人と関わることを億劫に感じていた。自分にも周囲にも興味が無く、高校二年生の春、編入した先で教師の金原に出会う。生きていることを少しずつ前向きに考え始める日和子。しかし、その過去に隠された衝撃の事実とは…？

01:ウーパールーパーとわたし

水槽のぶ厚いガラス越しにこちらを見つめ返してくるウーパールーパーが、わたしは心底羨ましかった。ぼんやり水の中に浮かんで降ってくるエサを待つ。ただそれだけ。面倒なしがらみを全部取り払って、わたしもそんな生き方がしたい！と憤慨したけれど、生憎水槽の中に収まるほど小柄な身ではないので、仕方なく辺りを見渡した。ここは、理料研究室の前だ。

つまり、わたしの居場所はここではない。目指すは教員室だ。校舎が何十年も前に建てられたからと言って耐震工事をするのは良いけれど、生徒数が増えて教室が足りなくなっただけでリフォームを繰り返すのはいかなるものか。新しい部分と古い部分がごちゃごちゃになっていて不格好だし、何より校舎の中が迷宮のように入り組んでる。理料研究室の先が行き止まりだなんて、文字通り行き当たりばったりだ。

再び、一階の理料研究室 数学科研究室の前を通りすぎながら、わたしはこの階に教員室がないことを知った。全くもって分かりにくい。だからとりあえず、下の階からしらみ潰しに見て回ろうと決めた。

二階には一階と同じように、国語科と英語科の研究室が並んでいた。この先もどうせ行き止まりなんだろうと高を括っていたら、なんとそこには社会科学研究室。わたしは少し、裏切られた気分になる。教員室も未だに見つからないので、二重に裏切られた気持ちでぼんやり突っ立っていると、少し開いたドアの隙間から忙しく誰かが往来しているのが見えた。

土曜日なのに、と思いながら、廊下の壁に貼ってあったお薦めの図書なるようなものを熟読していると、その誰かが、わたしを見つけた。

「あの、職員室ってどこですか」

先手は打った。見慣れない生徒の姿に困惑してたようにもみえるその人は、途端に人付き合いの良さそうな笑顔を浮かべると「ああ」と言った。

「谷田部クンののクラスの、転入生か」

「…はい」

その谷田部クンというのが誰かは知らないけど、転入生とは恐らくわたしのことだろう。案内するよ、というその人の言葉と共に顔を上げて、今来た道を引き返していくと、

「分かりにくいでしょう」

と頭上で声がした。

「校舎の中ですか？」

「そう。実は職員室はこの棟には無くてさ、あっちの、北棟の方なんだよね」

通りで見つかんないわけだね。わたしは心の中でそう独りごちて、大量の印刷物を抱えて横を歩く、その人を見上げた。社会科の研究室に居たからには、間違いなく社会科の教師なのだろうけど、プリントに書かれたフランス革命の文字に、わたしは深く納得した。「フランスには、行ったことがありますか」

南棟から北棟までの渡り廊下は、存外長かった。沈黙に耐えかねて、苦し紛れ飛び出した質問に、その人は快く答える。

「旅行が好きで、色んなところに行ったよ。勿論フランスも」

「へえ」

しかし一方のわたしはというと、気の利いた返事一つ返せない、つまらない女なのだ！それ以上会話が続き見込みもなく、いつものように陰鬱とした自己嫌悪に陥っていると、なんとその人は何も気にしていないかのように、

「でも、一番印象に残ってるのは西アフリカに行った時かな」と続けた。

西アフリカ。新鮮な響きだ。突如としてわたしの脳内に、葉っぱ

だけを身にまとして焚き火の周りを踊り狂うとある部族の映像が再生されたのだけど、それは我ながらベタすぎるだろう。ないないと思いつながら、小さく首を横に振った。

「ほんと、大変だったよ」

声は尚も続く。

「現地の原住民族の人たちに追いかけられたりして」

…マジかよ。

気がつくと、長かったはずの渡り廊下が既に終わっていた。教員室があると思いき北棟は古い校舎の形を多く残していて、不格好な南棟よりかはいくらかマシだな、と私は思った。その角を右手に曲がる。しばらく行くと、ようやく教員室の札が見えてきた。

わたしは、反射的に先ほどのウーパールーパーを思い出していた。爬虫類でも両生類でもなんでもいい。今すぐにでもここから逃げ出して、いつそのこと人類を辞めてしまいたい、と思った。

「それじゃあ、頑張つて」 よほどわたしの顔が緊張していたのだろうが、慰めるような声色で、西アフリカの人（？）は言う。何故だか知らないけど、申し訳なさそうに、眉尻が下がっていた。良い人だなあと、率直な感想を持った。

わたしは「ありがとうございました」と頭を下げると、ドアが開きつばなしの教員室に足を一步踏み出して、その瞬間、自分の意識が水槽の中のウーパールーパーと入れ替わる妄想をした。

「上村日和子（みけむいひこ）です、よろしく願います」

けれど現実には、まさかそうなるはずもなく。がらんとした、だだっ広い教員室に、わたしは再び頭を下げるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8749n/>

愛して暮れる

2010年10月10日00時35分発行